

【成果情報名】伊豆・小笠原海域におけるカツオの生物特性							
【要約】東北海域と伊豆・小笠原海域で漁獲したカツオの体長組成と成熟度を検討したところ、春から秋にかけて前者は未熟で成長が早く、後者は生殖腺が発達し成長が遅くなっており、両海域で生物特性の違いが認められた。							
【実施機関名】静岡県水産試験場漁業開発部資源海洋研究室 茨城県水産試験場沿岸資源部					連絡先	【電話番号】 054-627-1817	
推進会議	遠洋漁業関係試験研究推進会議	専門	水産資源	対象	かつお	分類	研究

【背景・ねらい】

伊豆・小笠原諸島は、南方海域で生育したカツオが日本近海域との南北移動を行うための主要な回遊ルートになっている。竿釣り船の盛漁期は、その北上期に当たる春から夏である。しかし、この海域では量は少ないが冬にも漁獲が行われ、1年を通してみるとほぼ周年カツオが分布する海域となっており、東北海域のカツオとは異なった生物特性を持っている可能性がある。そこで、今回は伊豆・小笠原海域と東北海域の体長組成と生殖腺測定結果を用い、両海域に分布するカツオの生物特性の違いについて検討した。

【成果の内容・特徴】

1990～1997年に東北海域と伊豆・小笠原海域で、春から秋にかけて漁獲された体長40cm台のカツオについて検討し、以下の結果を得た。

- ・1990年、1994～1997年の5年間は4月から9月にかけて体長モードの推移に違いが見られ、伊豆・小笠原海域ではこの間のモードにはほとんど変化は見られなかったが、東北海域では、この間のモードに10cm程度の伸長が認められた。
- ・伊豆・小笠原海域では、夏に成熟度が上昇した個体が多く出現したが、東北海域では、同時期には未熟な個体で占められた。
- ・成熟度の月変化を1993～1996年の4年間で検討したところ、1993年は夏に成熟度が低いままであったが、1994～1996年は、成熟度の上昇が見られた。
- ・以上のことから、春に日本近海に北上してきたカツオのうち、未熟な個体は東北海域に北上して、春から秋にかけて活発な索餌活動を行って、栄養を体成長に使う。一方、生殖腺が発達し始めた個体は春から夏にかけては伊豆・小笠原海域付近に滞留し、成熟の進行に伴い順次南下する様式が推察された。

【具体的データ】

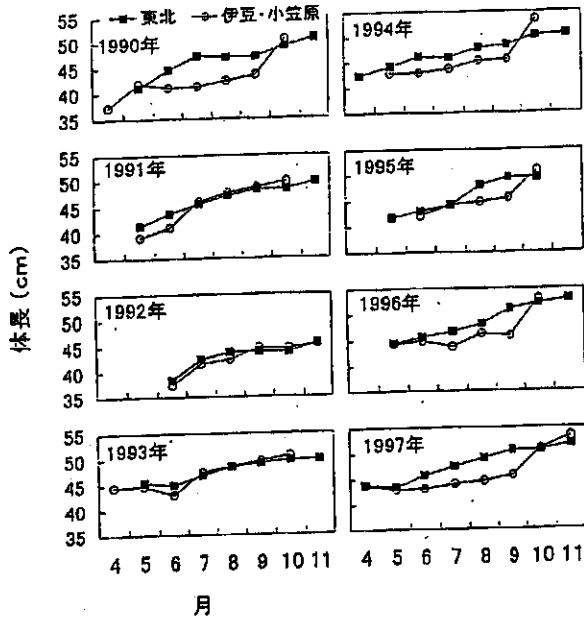


図1 体長40cm台の平均体長の月変化

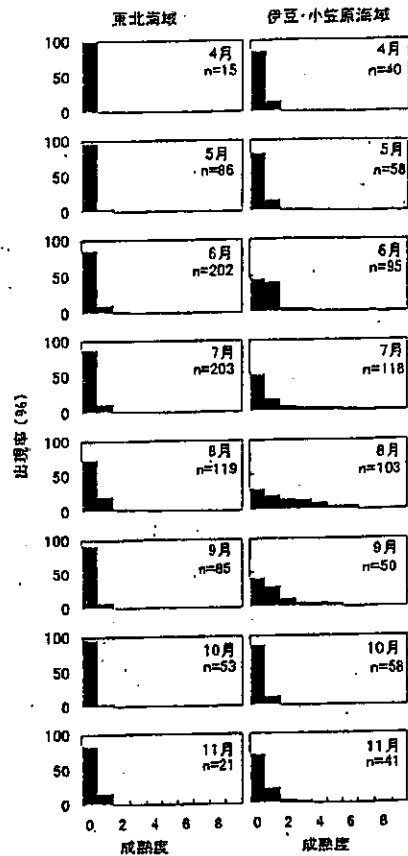


図2 体長40cm台の海域別の成熟度の月変化(雌)

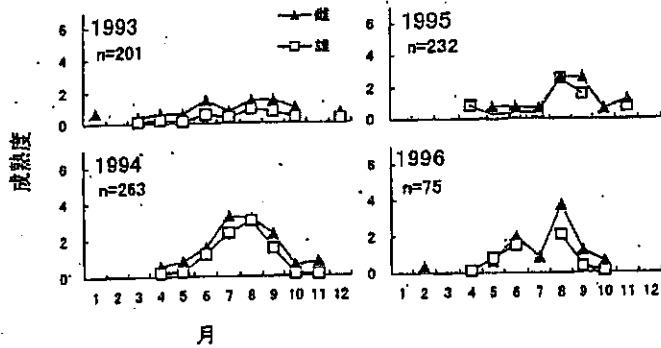


図3 体長40cm台の平均熱度指数の月変化 (伊豆・小笠原海域)

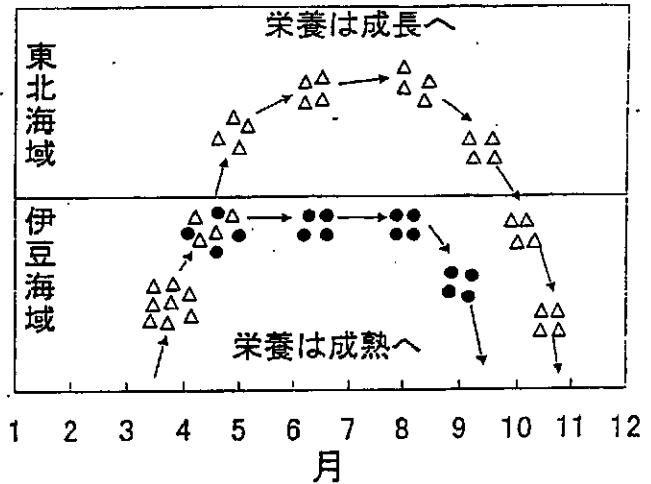


図4 カツオの移動モデル(△:未熟個体 ●:成熟個体)

【その他】

研究課題名：北部太平洋海域におけるカツオの漁場形成に関する研究

予算区分：県単

研究期間：平成6～11

研究担当者：増田 傑

発表論文等：伊豆・小笠原海域におけるカツオの生物特性、茨城水試研報 37、1999。